

「トレーラーで運ばれているのはなんと、飛行機の胴体なんです」

1 羽田空港を出発 (2020年3月28日 00:20)



写真提供：筑波総研(株) 野口稔夫

2 JR上野駅前を通過 (2020年3月28日 01:48)



写真提供：筑波総研(株) 野口稔夫

3 千住大橋を通過 (2020年3月28日 01:58)



写真提供：のりもの写真工房 高橋政士氏

4 筑波銀行筑西支店前を通過 (2020年3月28日 04:36)



写真提供：筑波総研(株) 野口稔夫

このタイトルフレーズは、2020年3月28日、「YS-11 (JA8610)」が上野駅前を通過する模様を伝えるNHK朝のニュースから流れた言葉だ。

筆者は職業柄、今年も様々な方と出会い、様々な体験をさせて頂いた。その中でも最大の思い出は、歴史ある国産旅客機YS-11を、羽田空港から「ザ・ヒロサワ・シティ」(茨城県筑西市)まで輸送するという前代未聞の「大作戦」に参画できたことである。

2019年8月、羽田空港の一角にある格納庫でYS-11の分解作業が開始、それと同時に、分解した飛行機の輸送計画の立案が始まった。厳重管理の羽田空港内への立入許可や都心の通行許可、胴体を振動から守る治具の製作等、問題は次から次へと噴出した。

周到的な事前準備を経て、当日を迎えた。あまり放映されていないが、実は前日の午後6時頃、露払い的に主翼が一足先に羽田空港を出発し、当日と同じルートでザ・ヒロサワ・シティまで運ばれている。一方、胴体は、道路を走行できる一般的制限値を超える車両であり、特殊車両通行許可の条件で、真夜中の出発となった。

左段1番上の写真は「羽田空港」から出発する様子を撮影したもの。特別許可を得て、通常、右折禁止の出口から出発した。2番目の写真は、NHKも撮影地として選んだ「上野駅」前通過時のもの。深夜にもかかわらず、輸送情報を聞きつけた30人以上のカメラマンの眼前を悠然と走り去った。

荒川にかかる「千住大橋」を渡った後、いよいよ住み慣れた東京に別れを告げ、国道4号を走り続けた。そして、本誌表紙に映る筑西市内に到着したのは、出発から4時間が経過した午前4時36分のことであった。

今回、保存されるYS-11 (JA8610) は、我が国唯一の純国産民間輸送機の量産初号機として、2007年に日本機械学会から「機械遺産」に、2008年には日本航空協会から「重要航空遺産」に認定されている。

現在、ザ・ヒロサワ・シティ内の格納庫では、一般公開に向けて、飛行機整備士OBの方々による組立作業が順調に進められている。今後も、安らかに余生を過ごせるように、出来る限りの協力をしていきたい。